

最初の国際酵母遺伝学集談会 (International Conference on Yeast Genetics) が、1961年にアメリカ・イリノイ州 Carbondale の南イリノイ大学で開催され、Gif-sur-Yvette (フランス、1963) での2回目、Seattle (アメリカ、1965) での3回目に続き、第4回目の会議が昭和43年 (1968) 9月25日の4日間、大阪ロイヤルホテルで開催された。その直前に第12回国際遺伝学会議が東京で開催されており、その好機をとらえての開催であった。組織委員長として芦田譲治先生 (京大) を戴き、参加者は国外からの23名を含めて約60名であった (文献1)。

本来この国際集談会は、当時発祥期にあった酵母遺伝学に興味を持つ研究者が一堂に会し、遺伝子符号と菌株の命名法などの研究情報の統一を図るのが目的であった (文献2)。したがって、非公式 (informal) な集まりであり、そこでの発言が直接に業績となるものではない。初期の Gif-sur-Yvette 会議と大阪のそれに参加した大嶋の記憶では、その頃の会議では、当然のことながら今日の一般学会で見られる講演あるいはポスター展示の方式をとらず、細かい研究データの提示はできるだけ避け、黒板を用いての簡明直裁な意見陳述、それに対する質疑応答と関連発現に十分な時間がとられていた。質問は話題提供者の説明途中でも頻発し、しばしば第三者間での論議に発展した。もちろん要旨集もなく、論議内容の引き回しは開催地のボスが殆ど一人で取り仕切り、午前と午後の区切りで大まかに話題の転換を図るといった状態であった。第2回目の Gif-sur-Yvette 会議からは主に研究成果が論議の対象とされたが、そこでも第1回目と同じく自由討論方式で会議は進行し、1970年開催の第5回 Chalk River (カナダ) 会議までこの方式が続いたようである (文献2)。要旨集が配布されたのは1976年の第8回目の Schliersee (ドイツ) 会議が初めてであり、今日の如く一般講演 (あるいはポスター展示) に招待講演とワークショップを織り成して行われる方式となったのは、1978年の第9回 Rochester (アメリカ) 会議からである。

酵母に限らず、新しいモデル生物種の開発期の研究集会は、この自由討論方式とならざるを得なかったであろう。しかし公用語が英語であることもあり、この方式による会議では大方の日本人には討議に参入し難いであろうと思われ、上記の大阪ロイヤルホテルでの会議では、幹事役となった関西在住の研究者グループ (後述) の考えで、可能な範囲で講演プログラムと要旨を用意した。さらに適宜セッション課題を設定し、それぞれの座長に適当な外人参加者を当て、日本人世話役一人を付けた (文献1)。それでも実際の会議は自由討論方式となり、重要な事項が関連発言のかたちで論議されることが多く、実際の会議内容は予定されたプログラムやアブストラクトとは程遠い状態であったと記憶している。会議初日の夜には時の中馬大阪市長をはじめ多くの来賓を迎えて歓迎会を開き、会議の一日 (4日) は京都方面へのエクスカーションを、また最終日にはお

別れの晩餐会を催した。肝心の会議の内容はここで記述するには長大に過ぎるので、末尾に示す大嶋の報告書（文献1）をご覧いただきたい。

さて、少々前置きが長くなったが、「酵母遺伝学集談会」の発足は、本会の会誌である Yeast Genetics News Japan の No. 1 (October, 1969) 第1頁の「発会にあたって」に述べられているように、上記の大阪ロイヤルホテルでの国際会議が終了後、国内参加者よりこの種の国内研究集会を定期的で開催することが強く要望されたのが発端である。そこで国際会議開催実行委員会を酵母遺伝学集談会準備委員会に切り換え、昭和44年10月14・15両日に第1回目の研究会を京都大学楽友会館で開催した。当時は大学紛争の最中にあり、研究会への参加者は27名であったが、国際会議での自由討論方式が取り入れられ、主に研究成果について時間を心配することなく論議の尽きるまでひとつのテーマで討論が続けられた。その具体的内容は会誌でご覧いただきたい。

酵母がモデル生物として定着し多くの研究者を擁するに及んでは、一般学会方式に移行することは当然の成り行きであるが、本集談会がそのような方式に移行を始めたのは、ようやく演題数が30題を越えた昭和52年(1977)頃であったと思う。演題数の増加により各発表に時間制限を設ける必要が生じたことと、その頃になると酵母を遺伝学あるいは一般生物学の研究材料とする研究室がようやく増加し、若い研究者と学生達の参加が増え、当時の柳島会長から「彼らにも話し易い環境を作ろう」との意向が話されたことを記憶している。それ以前の会では、各研究主導者(研究ボス)クラスでないと討論に参加するのは無理であった。しかし、今にして思えば、事細かな一般講演を聴くより、リラックスした雰囲気、本質的で実の濃いボスの話しが如何に面白かったかと、本文を書きながらその頃を懐かしく思い出している。特にかつての国際集談会は内面の本当の話しを聞く会であった。

集談会発足時の運営組織では会長を置くことなく、世話人会として国際会議実行委員会のメンバーであった平野 正(東京都立アイソトープ研)、中井 斌(放医研)、永井進(奈良女子大)、大嶋泰治(サントリー研)、玉置日出夫(同志社女子大)、高橋俊明(醸造研)が選任されて運営を担当した。大学紛争の折から事務所は企業の醸造科学研究所吹田研究所に置いた。その後、昭和46年に会則が改定されて会長制が採用され、それまでも代表格であった永井 進氏が初代会長に選任され、昭和46年8月(または45年8月)から47年3月までその任にあった。以後は世話人会の発案により、適宜に世話人会構成員の交代と正副会長の任免が提案され、研究会時に開催される総会において決められてきた。添付資料(年次要項)に各年会の実施年月日、開催地、演題数と担当会長名を示す。

当初より、年会では予めプログラムのみが配布され、会報は年会終了後に編集配布する方式がとられている。最初の会誌名は「Yeast Genetics News Japan」であったが、1982年度の会誌から、研究内容の変遷を受けて「Yeast Genetics and Molecular Biology News JAPAN」あるいは「Yeast Genetics and Molecular Biology News - Japan」と改められた。さらに本会の名称も、柳田充弘氏が会長時の動議で「酵母遺伝学フォーラム」と改められ、1995年度の会誌よりその名称で今日に至っている。

なお昭和46年ごろ、山本康氏（キリンビール）より酵母の研究について産業界研究者を含めた情報交換の場を設定することの要望があり、また昭和47年5月には、東大医学部 岩田和夫教授より日本酵母学会（仮称）設立の提案があった。後者については賛同者が広がらず立ち消えとなったが、前者については検討委員会（笠原秀夫、郡家徳郎、倉石 衍、山本康および永井 進の5委員）が結成され具体案が討議された。昭和48年5月1日には京都大学楽友会館において、当会に加えて酵母細胞研究会、イースト工業会、酵母研究会、清酒酵母研究会、石油発酵研究会の各団体代表者を交えて懇談会が開催され、2年目毎に開催する「酵母合同シンポジウム」でもって各界の酵母研究者間の情報交換の場とする案が採択され、同時にその第1回シンポジウムを、東京に拠点を置く酵母細胞研究会の担当で昭和49年（1974）5月に開催すると決められた。本シンポジウムは予定通り昭和49年5月28・29日の2日間、エーザイホール（東京）で「酵母の代謝と生理」の課題を掲げて開催されている。以後、ご存知のシンポジウムが2年毎に開催されて今日に至った。

以上、酵母遺伝学集談会発足時の事情と、それに関連する国内外の学界事情について、会誌と下記の資料に加えて記憶を頼りにまとめてみた。誤謬と未採録の事項も多いことと思う。大方のごS叱正により補填をしたい。皆さんよりの情報とご意見を願う次第である。

文献・資料

1. 大嶋泰治（1968）酵母遺伝学コンファレンスについて．醗酵協会誌 26:455-458.
2. von Borstel, R. C. (1993) The International Yeast Community. In *The Early Days of Yeast Genetics* (ed. M. N. Hall and P. Linder), pp.453-460. Cold Spring Harbor Laboratory Press, Plainview, NY
- 3) 酵母遺伝学集談会・フォーラム年会要項（添付資料）

（大嶋 泰治 平成 15 年 2 月 6 日記）

